JSOG Newsletter
Reason for your choice
No.18 April 2016
わたしたちの医療は“新しい生命”を生み出すためのものです。
ひとつでも多くの生命の誕生のために。すべての女性のために。　いま、わたしたちができることを…
公益社団法人 日本産科婦人科学会
JAPAN SOCIETY OF OBSTETRICS AND GYNECOLOGY

日本専門医機構 産婦人科領域
新専門医制度について

日本産科婦人科学会の産婦人科専門医制度は1987年4月に発足いたしました。本制度は産婦人科領域における広い知識、錬磨された技能、高い倫理性を備えた産婦人科医師を養成し、生涯にわたる研修を推進することにより、産婦人科医療の水準を高めて、国民の福祉に貢献してきました。

2015年度以後に初期研修を開始した人は、2017年度から始まる新専門医制度に切り替わります。新専門医制度では、「日本専門医機構（以下、機構）」が中立的第三者機関として、専門医、研修プログラム、研修施設の認定・更新などに関わることになり、それを日本産科婦人科学会がサポートします。

新しい専門医制度では、基幹施設が中核となり連携施設とともに施設群を形成します。基幹施設、連携施設は、専攻医数に見合う指導医数を要求されます（指導医1名に対し専攻医は4名まで）。基幹施設は、研修プログラムを作成し、それに基づいて、産婦人科専攻医の専門医資格取得までの全課程を人的および物的に支援します。基幹施設には研修プログラム管理委員会（統括責任者＋連携施設担当者）が設置され、専攻医および研修プログラム全般の管理を行います。専攻医の研修履歴、研修実績、研修評価、人間性評価を記録し、それを活用した計画的な研修と専攻医の研修修了認定を行うことになります。施設群の中核である基幹施設の代表は、プログラム統括責任者となり、専攻医の研修全般に責任を持ちます。全国の産婦人科研修プログラムの一覧は、日本産科婦人科学会のホームページから見ることができますので、是非ご覧ください。

産科婦人科学は「周産期」「生殖」「腫瘍」「女性のヘルスケア」の4本柱からなり、近年の急速な医学の進歩により学ぶことは多くあります。専門医制度は、19基本領域専門医とその上のサブスペシャルティ領域専門医の二段階制をとります。機構が認定しているサブスペシャルティ領域専門医は29ありますが、周産期専門医、生殖医療専門医、婦人科腫瘍専門医が含まれています。女性のヘルスケア専門医もいずれ認められる予定です。このように、他の診療科と比べても産婦人科領域の診療は多岐にわたっており、かつ4つのサブスペシャルティ領域には学問的な深みと専門的な技能があって、それらのサブスペシャルティ学会の専門医制度が機構により高く評価されています。

日本産科婦人科学会では専攻医向けに機関誌に「研修コーナー」を連載し、教育にも力を入れています。また、学術講演会では「教育講演」や「生涯研修プログラム」を設けて専攻医に勉強の機会を提供しています。さらに、「若手医師企画」や2012年からは「専攻医教育プログラム」もスタートしており、将来の産婦人科を担う若手医師に対してのプログラムを充実させて、積極的に専攻医教育に取り組んでいます。

専門医の認定は2年間の初期研修と機構が認定する研修施設群（基幹施設＋連携施設）での3年間の専攻医研修後に申請できます。産婦人科4領域の診療実績、専門医共通講習（医療倫理、医療安全、感染対策など）、産婦人科領域講習、学術実績（論文および学会発表）が修了判定に含まれます。審査は、基幹施設での修了判定に続いて、筆記試験、面接試験を予定しています。日本産科婦人科学会が発行している「産婦人科研修の必修知識」が筆記試験対策に役立つでしょう。

近年、本邦における産婦人科の専攻医は女性が約3分の2を占めます。日本産科婦人科学会は、女性が働きやすい職場づくりをサポートすべく、ワークライフバランスを重要視し、産婦人科医の労働環境改善に取り組んできました。産婦人科領域の専門研修プログラムは、いずれも専攻医の労働環境が十分考えられたものとなっています。そして専攻医および指導医により各研修施設やプログラムに対して定期的に評価が行われることで、労働環境を含め、研修プログラムが継続的に改良されます。

将来、さらに高度な専門性（サブスペシャルティ）を持った医師を目指される諸君も産婦人科の専門医はその土台となります。現在、将来の専攻を迷っている初期研修医、学生諸君には是非、私達と一緒に産婦人科医療を通じて、国民の福祉に貢献し、将来の産婦人科医療を支えていただきたいと思います。

産婦人科若手委員会が発足しました！

若手のリクルートと教育をミッションとする未来委員会内に若手の意見を抽出する目的とし、卒後 10 年前後の若手医師による委員会が発足しました。メンバーは既存の若手組織であるJTOG（Japanese Trainees in Obstetrics and Gynecology）のメンバー10名に加え、今回平成27 年 10 月より公募により選考された新メンバー 10名を追加し、活動を開始しております。メンバーは北は北海道、南は九州まで様々な地域から選出されており、それぞれの立場で抱える問題点などをお互い共有することにより、より専攻医リクルートの観点から効果的と思われる企画を練り、これらのアイデアを親委員会である未来委員会に発案し場合によっては運営も行う予定です。現時点で若手委員の関与する仕事はサマースクール、スプリングフォーラム、WATOG（World Association of Trainees in Obstetrics and Gynecology）、若手委員会のHP立ち上げ医学生フォーラム、そのほかリクルート効果のあると考えられる活動など多岐にわたっております。若手委員ならではの発想・行動力を生かし、様々な機会を作って研修医や医学生に産婦人科医のやりがいと奥深さを伝え、新しい産婦人科医の仲間を増やしていきたいと思っています。若手委員の任期は2年、毎年半数が交替です。産婦人科の未来を担う皆さんの応募をお待ちしております（2016年8月公募予定）。全国の仲間と一緒に未来を作っていきましょう。

開催予告
68th Annual Congress of Japan Society of Obstetrics and Gynecology
第68回日本産科婦人科学会学術講演会
次世代への継承とStandardization
会期：2016年4月21日㈭～24日㈰
会場：東京国際フォーラム　学術集会長：井坂 恵一 東京医科大学教授

今回のテーマは「次世代への継承とStandardization」です。産科婦人科は言わずもがな外科系分野であり、古代ラテン語でいうところのアルス（技術）の習得が不可欠です。この医療技術の継承が、医学の進歩と発展に大きく寄与してきたものと思っております。また、現代では優れた医療技術を秘匿し門外不出のものとする時代ではありません。優れた医療技術は、新しい医学知識とともにあまねく広く普及されるべきでしょう。縦のつながりの技術・知識の継承と横のつながりによるそれらの均てん化が、これからの医学の発展には肝要なのではないでしょうか。多くの医師や科学者が集まる学術講演会は、新しい技術や知識の継承とStandardization（標準化、均てん化）にもっともふさわしい場の一つであろうと思っております。

今回の学術講演会では、新しい企画や大きく変わった点がいろいろとございます。藤井理事長主導のもと、本会の国際化に向けて学術講演会の英語化が検討されていますが、今回は手始めとしてInternational Sessionの充実を図りました。International Session Award候補演題のプログラム、International Session ミニワークショップやInternational Sessionポスターセッションなどに例年の3倍以上の演題が予定されております。International Workshop for Junior Fellowsでは、本会と交換プログラムを有する各国（米国、台湾、韓国）産婦人科団体の若手医師と日本の若手医師とが、「帝王切開の適応と術式」「肉腫の診断」「産婦人科における当直体制」について、各国の現状や問題点をディスカッションします。また、AOFOGとのコラボによるAsian Sessionも企画しました。

会長企画の「Stump the Professors～教授たちと知恵くらべ～」では、若手産婦人科医が症例提示を行い、疾患名を当ててもらうことにより教授たちに挑みます。医学生を対象とした「医学生フォーラム」では、産婦人科をとりまく三つの問題「女性の社会進出とライフスタイルの多様化」「これからの産婦人科教育」「産婦人科医療施設の集約化」について、全国から集まった医学部6年生がグループディスカッションとその結果のプレゼンテーションを行います。新しい専門医制度に向けて、12の日本専門医機構の定めるプログラム（機構単位付加予定講演）も用意いたしました。これらプログラムの他にも、一般演題として日本語の口演やポスター発表が行われます。前回に引き続き、ポスター発表は座長進行による発表形式ではなく自由討論形式としました。興味ある演題については、活発な議論を期待しております。

是非、多くの皆さまに、ご参加いただけることを心よりお待ちしております。

▶全文はWEBサイトに掲載しています。ぜひご覧ください！

学術講演会参加費優待
68th Annual Congress of the JSOG
★ 医学生……無料
★ 初期研修医（非会員）……3,000円
★ 初期研修医（会員）……無料
※学生証、証明書をご提示ください。

第9回 産婦人科サマースクール in 美ヶ原 開催報告

2015.8.1 Sat -2 Sun　SUMMER SCHOOL 2015

今年で第9回目の開催になりますが、恒例の産婦人科サマースクールが齋藤滋委員長の下、長野県松本市の美ヶ原温泉、ホテル翔峰で行われました。結果的に、医学部5年生：55名（男性15名、女性40名）、医学部6年生：52名（男性20名、女性32名）、初期研修医1年目：97名（男性39名、女性58名）、初期研修医2年目：110名（男性45名、女性65名）の合計314名にご参加いただきました。今年も実技プログラムを、学生と初期研修医のレベルに応じた二本立てで行いました。昨年同様、公募で選ばれた若手医師実行委員のサポートをいただき大盛況のうちに開催することができました。

第一日目は婦人科腫瘍、婦人科内視鏡、産科超音波検査に関する実習をメインにプログラムが進行しました。婦人科腫瘍はPC上で自由に病理組織標本を観察できるバーチャルスライドシステムを利用したQ&A方式の診断実習を行いました。今年のテーマは婦人科腫瘍と妊孕性温存で、手術映像も交えながら子宮頸癌と卵巣癌の症例を取り上げました。婦人科内視鏡実習では、鉗子の基本的動作から縫合・結紮までのトレーニングを、各種シミュレーターを用いて行いました。産科関連実習では、超音波実機を用いた胎児計測や胎児異常の検出、3次元エコーでの胎児描出実習、分娩トレーニングなどを行いました。参加者の皆様には産婦人科臨床現場の一端をバーチャルに体験していただけたことと思います。

午後1時から7時までのぶっ続けの実技トレーニングでお疲れの中、立食の全体懇親会にご参加いただきました。約1時間半程度でしたが、新たな縦と横のつながりの中、大変賑やかにご歓談と懇親をされていました。昨年と同じく、産婦人科先輩医師によって結成されたNST（Nissanfu Sound Team）の演奏が行われました。楽しい曲のもと、飛び入りでダンスをされつつ大盛り上がりでした。懇親会の後は、アドバンスコースプログラムを受講された方は、夜遅くまで指導者とともに熱心に語り合いながら実技をされていました。二次会会場で懇親を続けられる方は、全国から届けられた銘酒、名物とともに、先輩、後輩胸襟を開き、熱心に語り合う姿が見られました。また、忙しい合間を見計らって、美ヶ原温泉の名湯に入られ、汗を流された参加者も少なくなかったと思います。夜の総懇親会は、第8回が26時までであったものを1時間早めて25時までには散会とし、翌日プログラムに元気で参加できるようにそなえました。

第2日も今までにはない形で幅広い分野で実技を取り入れ、参加者に、より満足感をいただけるような形に工夫致しました。具体的には産科関連では、CTGの読み方、新生児救命および産科母体救命プログラム、分娩シミュレート（児頭の回旋、吸引分娩）、そして婦人科分野では「婦人科手術体験」として、腹腔鏡、ダヴィンチのシミュレーターと各種パワーデバイスの実機を用いた実習を、短時間ながら濃密に行っていただきました。

その後は若手医師企画として第一部は研修医と学生に別れて、第二部は女性と男性に別れて、若手目線を通じた参加者への メッセージが発信されました。ほぼ同世代からの生の声と言うこともあって、きっと参加者の心の琴線に響いたと思います。

そういうことで、第9回目の産婦人科サマースクールも大勢の学生・研修医の皆さんと企画者にご参加いただき大成功に終わりました。今回参加された皆様が、将来、1人でも多く産婦人科医になっていただき、ご一緒に我が国の産婦人科医療を支えていただける日が来ることを楽しみにしております。

参加者の声

ここで紹介しているものは抜粋です。全文は日産婦HP内「Reason for your choice」に掲載中です。ぜひご覧ください！

初めは会場の広さや参加者の多さに圧倒されましたが、実習がメインの日程で徐々に緊張がほぐれていきました。特に腹腔鏡手術の実習では、シミュレーターを使って手技を指導していただき、とても臨場感がありました。普段は見ていることの多い腹腔鏡の手技を実物の鉗子を使って実習でき、その難しさや面白さを体感することができました。また、夜遅くまでエコーや鉗子・吸引分娩のブースが開放されており、ひとつひとつじっくりと指導していただきました。

他病院の産婦人科の先生とも話す機会があり、進路や今後の目標について、実際に現場を経験している先生方に教えてもらうことができました。

このサマースクールを通して、産婦人科に対する興味が、将来の目標として具体的なものに変わったように思います。少しでも産婦人科に興味があれば、ぜひ一度参加してみてください！　【徳島赤十字病院 研修医2年目　多田 理恵】

どのプログラムも学生・研修医問わず産婦人科の仕事の魅力を身近に感じられるものばかりで、座学だけでは決して得ることのできない素晴らしい経験ができたと感じています。色々御指導して頂く中で、実際の現場で第一線として働く先生方の本音を多く聞けたことも自分にとってはとても有意義でした。

サマースクールの2日間を過ごす中でも特に魅力的に感じたのは、自分と同じく産婦人科に興味を持つ仲間と、それぞれの産婦人科に対するイメージや思いを共有できたことです。全国の産婦人科に興味を持つ学生・研修医が一堂に会する場というのは本当に貴重なものだと感じ、来年度から産婦人科医として頑張ろうという意思を強くする機会になりました。

【石川県立中央病院 初期研修医2年目　笠間 春輝】

昨年のポスターを見て興味を持ち、今年度も開催が決まればぜひ参加したいと考えていました。

今年度は8月1日2日に昨年と同じく長野県美ヶ原で行われました。プログラムは1日目に婦人科腫瘍・内視鏡・産科エコーの講演と実技があり、2日目には若手の先生方からの講演や男女でわかれての講演があり産婦人科の魅力を伝える内容でした。実技は5～10人のグループになって行う場合が多く、どのプログラムにおいても先生方が丁寧に指導してくださり大変有意義な時間を過ごすことが出来ます。また、産婦人科に興味を持っている他の大学の学生と交流できる機会もめったにないと思うので、初めて知り合った友達と学校生活や将来の話ができるのも魅力でした。

【京都府立医科大学医学部 医学科5回生　正木 葉子】

研修医の声

研修医の方々に、産婦人科を選んだ理由や、産婦人科に寄せる夢を語って頂きました。

患者さんと喜びや悲しみを分かち合える科

私が産婦人科を選んだ理由は、患者さんと喜びや悲しみを分かち合える科だと思うからです。産婦人科は他科に比べ、患者さんが心の内側を打ち明けて下さる機会が多く、治療のみならず精神的にも深く関わる科だと感じます。研修で私が受け持った患者さんは、長く辛い不妊治療の末ようやく子供を授かった切迫早産の方でした。これまでの治療の辛さや出産への不安を何度も話して下さり、私はただ聞くことしかできませんでしたが、その気持ちがよく伝わってきて、無事出産された時には喜びと安堵で一緒に号泣してしまいました。患者さんの方も「同じ女性なのだから理解してくれるはず」と女性産婦人科医に期待しているように感じます。その期待に応えられるよう、知識や技術だけでなく、広い度量を身につけていかねばと思っています。

慶應義塾大学病院 研修医・高柳 裕子

女性の苦痛を軽減し、喜びや安心へ変えていけるように

妊娠・出産の喜びを感じる女性と婦人科疾患のために苦しむ女性は、隣り合わせです。少しでも女性の苦痛を軽減し、喜びや安心へ変えていけるようにと思い、ずっと産婦人科医を志してきました。

初期研修では産婦人科専門コースを選択し、その期間に沢山の出産に立ち会い、お産の素晴らしさや難しさを実感しました。また、悪性腫瘍の手術、術後管理、化学療法などに関わる中で、婦人科疾患や外科手術についてもより意識が高まりました。大学では様々な研究分野を知り、学会に参加させていただき、研究という形でも患者さまを救っていければと考えています。

今後も産婦人科としてジェネラルな診療ができるよう研鑽をつみながら、理想とする産婦人科医を目指したいと思います。

富山大学附属病院 研修医・川口 美保子

【▲全文はWEBサイトに掲載しています。ぜひご覧ください！】

JSOG Newsletter
Reason for your choice
2016年4月1日　第18号

発行：公益社団法人 日本産科婦人科学会
〒104-0031 東京都中央区京橋3丁目6-18
東京建物京橋ビル4階
TEL: 03-5524-6900 / FAX: 03-5524-6911

編集：日本産科婦人科学会 広報委員会
http://www.jsog.or.jp/
nissanfu@jsog.or.jp
デザイン / 印刷：株式会社 杏林舎

公益社団法人 日本産科婦人科学会
JAPAN SOCIETY OF OBSTETRICS AND GYNECOLOGY

本誌掲載記事、写真等の無断複写・複製・転載を固く禁じます。　©Japan Society of Obstetrics and Gynecology